

保育者の文字指導観に関する考察

－保育者は幼児の文字との関わりをどのように捉えているのか

藤 本 朋 美

A study on nursery school and kindergarten teachers' views of teaching letters.

FUJIMOTO Tomomi

キーワード：文字指導、幼児教育、文字教育、保育者、幼小接続

概要：本研究では、幼児教育から小学校教育に向けて途切れることのない文字指導を目指し、幼児期の文字習得を中心とした言語獲得の契機、幼児の文字意識の発達過程及び保育者の役割について検討を行った。さらに質問紙調査結果をもとに保育者が幼児の文字との関わりをどのように捉えているのかについて分析を行った。

その結果、保育者は自身の保育において文字指導に関わる環境構成や支援・指導を行っているにもかかわらず、自身が文字指導を行っているとは自覚していない現状が明らかになった。

本研究の成果は、(1) 上記の保育者の文字指導に対する無自覚を柴崎 (1987) の主張する「トップダウン的意識」と「ボトムアップ的意識」及び稲垣・波多野 (2003) の指摘する「文化のなかの隠れた教育」を用いて説明したこと、(2) 保育者の文字指導観には「ボトムアップ的意識」が強く意識されており、「トップダウン的意識」による指導は文字指導として意識されていないことを指摘した点にある。

一方、本研究では、文字獲得過程における子どもたちの発達段階を要素として抽出し、それらと保育者の文字指導を関連付けることができなかった。今後は、文字獲得過程における子どもたちの育ちとそのための指導の詳細を明らかにし、ひいては幼小接続期における育ちを検討するための指標として確立することを目指したい。

1. 問題の所在

文字のまとまった学習は小学校入学を期に始められる¹。しかし、幼児の多くは就学前に平仮名を読むことができ、自分の名前を平仮名で書くことができる状況にある。巢立・和田 (2014) は、幼児教育現場の多くでは、就学に備え何らかの文字指導がなされているものの、その指導について何をどこまで行えばよいか幼児教育が担う範囲は不明であることを指摘している。前田 (2015) は前項に加え、小学校教員は、入学時点ですでに筆記具の持ち方に癖がついていたり筆順を誤って覚えていたりする児童について、その矯正に困難さを感じていることを指摘している。こうした就学前後の子どもたちの文字指導に関わる保育者や小学校教員の困惑を考えれば、幼児教育から小学校教育に向けた段階的・系統的な文字教育のあり方を提示することが急務である。

そこで本研究では、幼児教育から小学校教育に向けた段階的・系統的な文字教育を目指し、幼児の文字習得を中心とした言語獲得の契機、幼児の文字意識の発達過程及びその場での保育者の役割を見渡すことを目的とする。

そのためにまず、幼児の文字習得を中心とした言語獲得の契機について、稲垣佳世子・波多野 余夫 (2003) の提示した「文化のなかの隠れた教育」を参考にしながら整理する。次に、幼児が平仮名をどのようにして覚えていくのかその発達過程について、柴崎正行 (1987) の提示した「文字意識の発達過程」を参考にしながら確認すると同時に、幼児教育において文字指導を行う保育者の役割について検討する。最後に、保育者は自身の保育において、幼児の文字との関わりをどう位置づけているのかについて、保育者を対象に行った質問紙調査の結果をもとに分析する。

2. 幼児の文字習得を中心とした言語獲得の契機

まず、稲垣佳世子・波多野諠余夫(2003)による「文化のなかの隠れた教育」をもとに、幼児の文字習得を中心とした言語獲得の契機について整理する。

稲垣・波多野は、知的好奇心に関する研究と日常的認知の研究とを拠所とし、日常生活のなかで人はいかに学ぶのか、その仕組みを明らかにしている。その中で、人の学習には文化のなかの隠れた教育が大きな役割を果たしていると主張し、子どもたちが就学前に文字学習を成し遂げてしまうことについて、次のように説明する。

このような(平仮名を読める幼児の割合が増えている)結果は、家庭で親が文字を教えこんだことによるのだろうか。それとも園で、組織的に文字教育をしたためであろうか。どちらも「否」である。(中略)／では、とくに何も教えられていないにもかかわらず、なぜ子どもは文字を読めるようになるのだろうか。文字学習は特別やさしい学習なのであろうか。けっしてそうではない。むしろ文字は、一般的にいえば、学びにくい性質をもっている。(中略)／なぜこのような本来学びにくいはずの文字学習を、幼児はいともたやすく成し遂げてしまうのであろうか。これは、容易に学習できるよう文化が助けているからだ、と見るべきであろう。(括弧内引用者)²

さらに、稲垣・波多野は、天野(1986)の研究成果から文字を学ぶ際の音韻的意識の重要性を確認した上で、文化による学習の助けについて、次のように主張する。

こう見てくると、音韻的意識が、文字習得の基礎として重要であることが納得できるであろう。興味深いことは、それぞれの文化は、とくに書きことばをもつようになってからは、こういった音韻的意識を発達させるさまざまな遊びを、子どもたちのなかに、それと気づかせないままに導入・保持してきたのではないか、と考えられることである。／幼児期によく行われる

むかしながらのリズム歌や手遊び歌はその一例である。たとえば、「むすんで、ひらいて」の歌を取り上げてみよう。歌に合わせて子どもは、手のひらを開いたりとじたりするわけだが、これは、一音節一拍から成り立っている。この遊びに講じながら、子どもたちはしらすらすらうちに、単語を音節に分けることを学んでいくであろう³。

つまり、子どもたちは遊びを通じて音韻的意識を発達させ、文字学習の準備を行っているのである。しかも「それと気づかせないままに」である。

さらに、文字学習における文化的準備のもう一つのあり方として、「文化による価値づけ」を例に挙げ、幼児の文字学習が効果的になされる背景を説明している。

自分のまわりに多くの文字があり、しかもそれを使って生活しているおとなの姿を繰り返し目にすること、これを通して子どもは、識字に対して高い価値をおくようになるのであろう。文化によるこのような準備があってはじめて、幼児の文字学習が効果的になされるのである⁴。

以上のことから、幼児の文字習得を中心とした言語獲得の契機として、遊びを通じた音韻的意識の発達と文化による識字への価値づけの二点を確認することができる。

3. 幼児の「文字意識の発達過程」と保育者の役割

前項において、幼児の文字習得の契機として、遊びを通じた音韻的意識の発達と文化による識字への価値づけの二点を確認した。では、それらを経て、幼児はどのように文字を習得していくのだろうか。このことについて、柴崎(1987)の「文字意識の発達過程」を確認するとともに、文字指導における保育者の役割について考察を行う。

柴崎は、幼児が平仮名をどのように覚えてくのか、その発達過程について、幼児が文字をどのようにとらえているかという「文字意識の発達」と「読み・書字の獲得過程」との対応から検討している。

表1 平仮名の獲得過程⁵

段階	文字意識	読みの獲得過程	書字の獲得過程
1	文字の果たしている機能的側面への気づき	生活の中で文字に親しみその記号としての機能に気づく	
2	読む、書くという行為の主体者として自己を意識する	文字の読み手として自己を主体的に位置づける	線を描くことによって、書くという行為を楽しむ
3	文字のもつ構造的側面への気づき		見ようみまねで、文字らしい形を書けるようになる
4	文字の機能的使用者として自己を意識する		文字のもつ機能的側面をあそびの中で展開する
5	文字を読むようになるがまだ語と一体化している	自分の知っている文字を他の文字と区別して読む	
6	個々の文字を書くことに興味をもつ		名前や数字など、身近な文字を正しく書けるようになる
7	文字のもつ構造的側面を利用して、音節読みができる	自発的に音と文字を対応づけ平仮名の読みを覚えていく	
8	文字をまとまりとして読めるようになる	個々の文字を統合して平仮名単語を読めるようになる	
9	文字を機能的に用いるようになる		伝達や意志表示の手段として文章を書くようになる
10	読み書きの精緻化に関心を払うようになる	たどり読みながら文を読めるようになり、特殊音節の読みに習熟していく	文字の誤りを自分でも意識的に直すようになり、正確に書けるようになる

(注) ----- トップダウン的意識 ————— ボトムアップ的意識

表1は柴崎が示した「平仮名の獲得過程」である。柴崎は、文字意識の発達をトップダウン的意識とボトムアップ的意識とに分けて考えており、次のように説明している。

トップダウン的意識というのは、生活の中で文字に親しむことによって文字の機能的側面に気づき、自己を読み書きの主体者として位置づけることにより、実際に文字を機能的に使用していく方向性であり、将来は作文へと発展していくものと思われる。

一方、ボトムアップ的意識というのは、文字らしいものを書きなぐる体験の中で文字のもつ構造的側面を意識するようになり、その後実際に文字を読んだり書いたりする中で、音節読みから単語読みを経て文読みへ、文字書きからやがては文書きへと統合されていく方向性であり、読み書き能力が精緻化され完成されていく過程でもある⁶。

その上で柴崎は、文字意識の発達はこれまでは

ボトムアップの方向性をもつものとして考えられてきたが、実はまずトップダウンの方向性が先行しており、後でボトムアップの方向性を持つようになるとしている。そして、子どもの視点に立った文字指導の必要性を次のように主張する。

幼児の文字獲得に関する従来の研究は、後者（ボトムアップ的意識）について考究することが多かったと思われる。そのために、文字を覚えるために必要な知識や技能を、幼稚園や保育所でどのように教えたらいかがという議論がしばしばなされてきた。しかし、前者のトップダウン的意識が獲得されているからこそ、後者のボトムアップ的意識が順調に獲得されていくという事実を考えると、これまでは無駄であると考えられてきた、自己流のなぐり書きやお話し読み、文字らしきものを使った文字ごっこあそびなどの果たす役割の重要性が明らかとなってくる。さらにまだ文字を読み書きできる以前から、子ども達ひとりひとりが読み書きの主体者として自己を意識できるような、豊かな環境

を準備しておくことの意味も明らかになってくる⁷⁾。
(括弧内引用者)

ここに幼児教育において文字指導を行う保育者の役割を読み取ることができる。つまり、保育者にはトップダウンの方向性を意識しながら「子ども達ひとりひとりが読み書きの主体者として自己を意識できるような、豊かな環境を準備しておく」ことが求められるのである。

具体的にはどのような援助を行っていけばよいのだろうか。このことについては、現行の幼稚園教育要領(2008)に確認することができる。『幼稚園教育要領解説(平成20年10月)』⁸⁾では、保育者の援助について次のことが示されている。

○領域「環境」において

- ・保育者は自然に文字に触れられるような環境を構成することを通して、文字が様々なことを豊かに表現するためのコミュニケーションの道具であることに気付いていくことができるよう援助する必要がある。
- ・幼児が文字を道具として使いこなすことを目的にするのではなく、文字が存在していることを自然に感じ取れるように環境を工夫し、援助していくことが重要である。

○領域「言葉」において

- ・遊びと密着した形で文字の形や意味や役割が認識されたり、記号としての文字を獲得する必要性が次第に理解されたりしていく幼児の体験にそって、その幼児の必要に応じてかわっていく必要がある。
- ・教師は、文字について直接指導するのではなく、文字を通して何等かの意味が伝わっていく面白さや楽しさが感じられるように指導する必要がある。

4. 保育者は幼児の文字との関わりをどのように位置づけているのか

実際に幼稚園や保育所等で勤務する保育者は、自身の保育において幼児の文字との関わりをどのように位置づけているのだろうか。ここでは保育者への質問紙調査の結果によって得られた結果を分析することにより、保育者の文字指導観につい

て検討する。

1) 質問紙調査の概要

○調査対象者

平成29年度南九州大学人間発達学部教員免許状更新講習科目「幼児期に育てておきたい資質や能力～数量・図形・文字など～」への参加者(宮崎県内において保育所・幼稚園・認定こども園等に勤務する保育者)のうち、調査の趣旨に賛同いただいた方を対象とした。回答者97名のうち有効回答者数は80名であった。

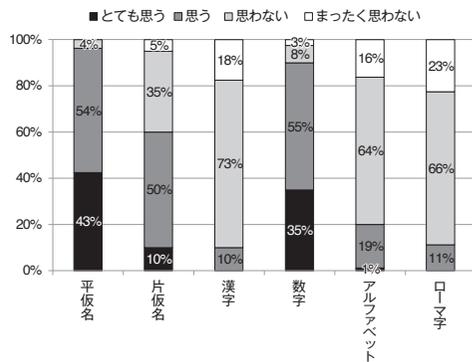
○調査時期 平成29年8月

○調査内容及び回答方法

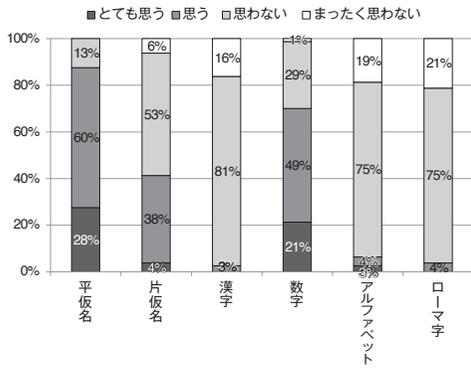
- (1) 文字を読むこと・文字を書くことについて指導の必要性や指導の有無について選択肢により回答する。
- (2) 「幼児期における文字との関わり」の事例について、自由記述により回答する。

2) 文字指導に関する回答(選択式)の集計結果

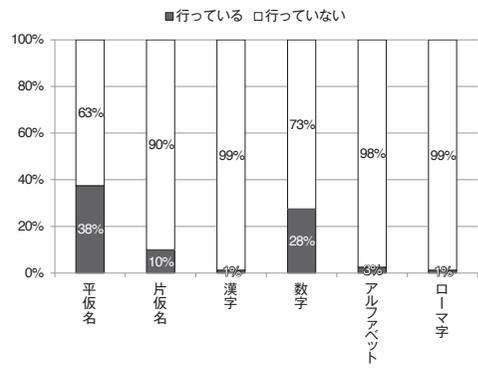
各設問における回答をグラフ1からグラフ5に、各設問間のクロス集計表を表2から表11に示す。



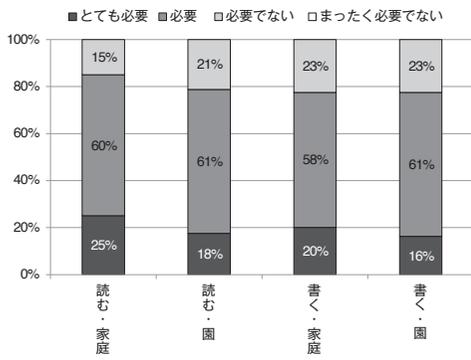
グラフ1 小学校入学前までに文字を読めることが望ましいか



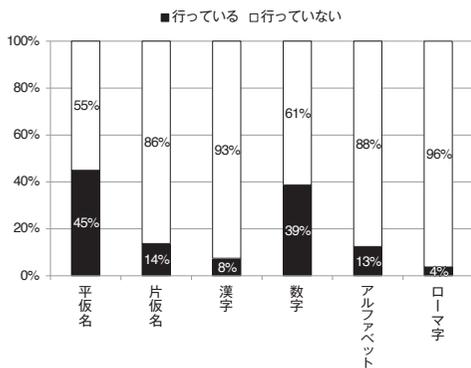
グラフ2 小学校入学前までに文字を書けることが望ましいか



グラフ5 保育内で文字を書く指導を行っているか



グラフ3 小学校入学前に指導が必要か



グラフ4 保育内で文字を読む指導を行っているか

表2 「平仮名を読めることが望ましいか」と「家庭での読み指導の必要性」

		平仮名を読めることが望ましい		総計
		思わない	思う	
家庭での読み指導	必要でない	2	10	12
	必要	1	67	68
総計		3	77	80

表3 「平仮名を読めることが望ましいか」と「園での読み指導の必要性」

		平仮名を読めることが望ましい		総計
		思わない	思う	
園での読み指導	必要でない	2	15	17
	必要	1	62	63
総計		3	77	80

表4 「平仮名を読めることが望ましいか」と「平仮名読み指導の有無」

		平仮名を読めることが望ましい		総計
		思わない	思う	
平仮名読み指導の有無	行っている	1	35	36
	行っていない	2	42	44
総計		3	77	80

表5 「園での読み指導の必要性」と「平仮名読み指導の有無」

		園での読み指導		総計
		必要でない	必要	
平仮名読み指導の有無	行っている	6	30	36
	行っていない	11	33	44
総計		17	63	80

表6 「家庭での読み指導の必要性」と
「平仮名読み指導の有無」

		家庭での読み指導		総計
		必要でない	必要	
平仮名読み指導の有無	行っている	4	32	36
	行っていない	8	36	44
総計		12	68	80

表7 「平仮名を書けることが望ましいか」と
「家庭での書き指導の必要性」

		平仮名を書けることが望ましい		総計
		思わない	思う	
家庭での書き指導	必要でない	6	12	18
	必要	4	58	62
総計		10	70	80

表8 「平仮名を書けることが望ましいか」と
「園での書き指導の必要性」

		平仮名を書けることが望ましい		総計
		思わない	思う	
園での書き指導	必要でない	8	10	18
	必要	2	60	62
総計		10	70	80

表9 「平仮名を書けることが望ましいか」と
「平仮名書き指導の有無」

		平仮名を書けることが望ましい		総計
		思わない	思う	
平仮名書き指導の有無	行っている	2	28	30
	行っていない	8	42	50
総計		10	70	80

表10 「園での書き指導の必要性」と
「平仮名書き指導の有無」

		園での書き指導		総計
		必要でない	必要	
平仮名書き指導の有無	行っている	4	26	30
	行っていない	14	36	50
総計		18	62	80

表11 「家庭での書き指導の必要性」と
「平仮名書き指導の有無」

		家庭での書き指導		総計
		必要でない	必要	
平仮名書き指導の有無	行っている	6	24	30
	行っていない	12	38	50
総計		18	62	80

(1) 回答の分布

グラフ1～グラフ5から、保育者の文字指導に関する意識を確認する。

①小学校入学前までに文字を読めること・書けることが望ましいか

グラフ1「あなたは、子どもたちが小学校入学前までに文字を読めることが望ましいと思えますか」について、回答者の過半数が「読めることが望ましい」とした字種は、平仮名(97%)、片仮名(60%)、数字(90%)である。同様に、

グラフ2「あなたは、子どもたちが小学校入学前までに文字を書けることが望ましいと思えますか」については平仮名(88%)、数字(70%)である。

②小学校入学前に文字を読む指導・書く指導が必要か

グラフ3「あなたは、小学校入学前に文字を読む指導が必要だと思いますか」および「あなたは、小学校入学前に文字を書く指導が必要だと思いますか」について、回答者の8割以上が園や家庭での指導が必要だと回答している。

③保育内で文字を読む指導・書く指導が行われているか

グラフ4「あなたは、保育内で文字を読む指導を行っていますか」およびグラフ5「あなたは、保育内で文字を書く指導を行っていますか」について、平仮名について「読む指導を行っている」と回答したのは全体の45%、「書く指導を行っている」と回答したのは全体の38%である。数字については「読む指導を行っている」と回答したのは全体の39%、「書く指導を行っている」と回答したのは全体の28%である。全体として「指導を行っていない」と回答した者の割合が高い。

(2) 設問間の関連

表2～表11に示した設問間に関連があるか、それぞれについてカイ二乗検定を行った。

結果、設問「小学校入学前に平仮名を読めることが望ましいか」と設問「小学校入学前に文字を読む指導が必要か」との間(表2: $\chi^2(1) = 6.52, p < 0.05$ 、表3: $\chi^2(1) = 3.8418, p < 0.05$)、設問「小

学校入学前に平仮名を書けることが望ましいか」と設問「小学校入学前に文字を書く指導が必要か」との間（表7: $\chi^2(1) = 9.21, p < 0.05$, 表8: $\chi^2(1) = 21.6, p < 0.05$ ）に関連が認められた。

つまり、小学校入学前に平仮名を読めること・書けることが望ましいと思う保育者ほど、指導が必要だと思う傾向にあるということである。

一方で、設問「小学校入学前に平仮名を読めること・書けることが望ましいか」と設問「保育内で指導を行っているか」との間（表4,9）、設問「小学校入学前に指導が必要か」と設問「保育内で指導を行っているか」との間（表5、6、10、11）には関連が認められなかった。

以上の結果から、次のことが明らかとなった。

- ア) 保育者は子どもたちが小学校入学前までに平仮名を読めること・書けることが望ましいと思っており、そのための指導が必要だと思っている。
- イ) 保育者の半数以上は保育内で文字に関する指導を行っていないと回答している。指導の必要性を感じることで、自身が保育内

で指導を行うことは、関連していない。

3) 自由記述に寄せられた「幼児期における文字との関わり」の事例

次に、自由記述「幼児期における文字との関わりにはどのような事例があるか、自身の実践を振り返りながらお答えください」に寄せられた回答から、保育者が幼児期の文字との関わりをどのように捉えているかについて検討する。

回答内容を整理した結果を表12に示す。左から、回答内容の区分、その事例、事例から導き出された保育者の役割とした。また欄外に、回答に記述された子どもたちの具体的な姿の例を挙げる。

回答には、主に園生活において幼児が文字と関わるための「文字環境」と「遊び」の二側面が記述されており、「文字環境」に関する事例は「個人名の標示」「物の名称標示や空間の標示」「教室・施設・設備の標識」「掲示や板書」「園外における標識」の5種類、「遊び」に関する事例は「絵本・紙芝居」「カード遊び」「手紙のやりとり」「わらべうた等」「その他玩具」の5種類に分類することができた。

表12 幼児期における文字との関わり

区分	事 例	保育者の役割	
文字環境	個人名の標示	名札、持ち物、作品、プリント、ロッカー、靴箱、当番表など	文字環境を整える
	物の名称標示や空間の標示	ドア、窓、机、時計、遊具、園庭の木・野菜・花	
	教室・施設・設備の標識	トイレ、相談室、職員室など	
	掲示や板書	月日・曜日・天気、給食の献立、行動予定や手順（折り紙、手洗いなど）、五十音図、歌詞、ことわざ、百人一首、詩	
	園外における標識	標識、看板、車のナンバープレートなど	
遊 び	絵本・紙芝居	文字に出会う楽しさを伝える	
	カード遊び〔カルタ、トランプ、言葉カード（動物、虫、植物、漢字）〕		
	手紙のやりとり		
	わらべうた、手遊び、歌遊び、言葉遊び		
	その他玩具〔パズル、ブロック、文字スタンプ〕		

【子どもたちの具体的な姿(例)】

- ・ 五十音図を指差しながら、「○○ちゃんの○」など自分の名前の文字を探して遊んでいる。
- ・ 絵本の中に自分の名前や友達、先生の名前の文字を見つける。
- ・ 自分の名前の文字を他の物から見つけて「一緒」と喜んでいる。
- ・ 「これは何て書いてあるの？」と保育者に尋ねる。
- ・ お互いの名前を呼びあう。
- ・ 教師の名札、友だちの名札の文字を読もうとする。
- ・ 連絡帳を配るとき、自分で名前を見て「○○って書いてある」など自分で確認したり言ったりする。
- ・ 名前カードを利用して子どもたち自身が出席をとる。
- ・ 当番を楽しみにして、当番表にある自分や友達の名前から順番を確認する。
- ・ 友達の前で発表する(当番活動：月日、曜日、天気、献立を発表)ことを楽しむ、楽しみにしている。
- ・ 手紙のやりとりを楽しむ。
- ・ 誕生日のメッセージカードを楽しみに待っている。
- ・ 自身が書いた手紙の内容について、実際は文字になっていない文字や絵を指差しながら説明する。
- ・ 園庭で土に指で円や線を描いたり、自由に描いたりする行為を楽しむ。

4)「幼児期における文字との関わり」の事例にみる保育者の役割

自由記述回答の分析から、「文字環境を整える」と「文字に出会う楽しさを伝える」という保育者の役割が確認された。これは、稲垣・波多野(2003)が「幼児の文字習得を中心とした言語獲得の契機」として主張する「文化による識字への価値づけ」と「遊びを通じた音韻的意識の発達」にそれぞれつながるものである。

保育者は、子どもたちが園生活をおくる手がか

りとなるよう個人名の標示をはじめとして様々な文字環境の整備や支援を行っている。この文字環境に触れることで、子どもたちは、私、私と物、私と場所、私と他者、私の物と他者の物、私の場所と他者の場所という区別を知り、主体者としての自己を意識することとなる。このことは、柴崎(1987)の主張する「まだ文字を読み書きできる以前から、子ども達ひとりひとりが読み書きの主体者として自己を意識できるような、豊かな環境を準備しておく」という保育者の役割の考え方と合致する。

5)「文字指導」が意味するもの

今回の調査において、「あなたは、保育内で文字を読む指導・書く指導を行っているか」との問いに、過半数の保育者が「行っていない」と回答している。しかし、「幼児期における文字との関わりにはどのような事例があるか」と問うと、全員が回答に子どもたちの具体的な姿やそれに応じた環境構成、支援・指導を記している。ここに記された支援・指導は現行の幼稚園教育要領(2008)に示されたものとも合致する。

実際に支援・指導を行っているにもかかわらず、なぜ保育者は自身の支援・指導を行っていないと回答するのであろうか。

調査で明らかになった保育者の文字指導観は、柴崎(1987)が示した「平仮名の獲得過程」における「ボトムアップ的意識(実際に文字を使ってみてその構造(形)に気付く意識)」と「トップダウン的意識(文字の機能(働き)について気づいてから使おうとする意識)」とにより読み解くことができる。

保育者にとって「文字を読むため・書くための指導」とは「ボトムアップ的意識」の視点から生じるものであり、実際に文字を読む・書くといった直接的な指導が想起される。しかし実際の保育では「トップダウン的意識」の視点をもとに環境構成を行い、支援・指導を行っているのである。幼稚園教育要領解説(2008)において「教師は、文字について直接指導するのではなく、文字を通して何等かの意味が伝わっていく面白さや楽しさが感じられるように指導する」旨が記載されてい

る。保育者が「文字指導」という語から想起するのは、この記述の前者「文字について直接指導する」ことであり、実際の保育において行っている「文字を通して何等かの意味が伝わっていく面白さや楽しさが感じられるように指導する」ことは想起されていないことが確認された。

保育・幼児教育の現場では、稲垣・波多野（2003）が指摘する「文化のなかの隠れた教育」が、文字環境や遊びという形で既に存在している。保育・幼児教育における文字環境づくりや遊びの展開は、保育者なしには考えられない。しかし、それらが保育者にとっても文化、つまり自身の日常的なかに隠れてしまっているがゆえに、文字指導を行っているにもかかわらずそれらを文字指導として自覚することができないのだと推察される。

幼児教育において「文字指導」という語をどのような意味で用いるのか、その定義を再考し、保育者間で共有する必要がある。

5. 幼児から小学生へ

—途切れない指導のための課題—

改めて、先行研究にみる幼小連携における文字指導、特に「書くこと」に関する課題を確認する。巢立・和田（2014）は、就学に備えた文字指導について、何をどこまで行えばよいか幼児教育が担う範囲が不明であることを指摘している。前田（2015）は、小学校教員は、入学時点ですでに筆記具の持ち方に癖がついていたり筆順を誤って覚えていたりする児童について、その矯正に困難さを感じていると指摘する。これらに指摘された幼児教育現場、小学校教員の認識は、子どもたちは小学校に入学する時点で「文字を書けるようになっていく」という認識であり、柴崎（1987）のいう「ボトムアップ的意識」についての指導観が強く意識されている。さらに、今回の調査において明らかとなった保育者の文字指導観でも「ボトムアップ的意識」が強く意識されていることが確認された。

幼児から小学生へ、途切れない文字指導を行うためにはどうすればよいのか。この課題を解決するために、次の三つの視点を提案する。

1) 保育者が自身の「文字指導」を自覚する

まずは、保育者が自身の保育内で行っている「トップダウン的意識」に基づく支援・指導を「文字指導」として自覚することである。保育者は、保育・幼児教育の場において実際には「トップダウン的意識」についての指導を行っているにも関わらず、それを「文字指導」として認識していない。そのことが幼児期の文字教育・文字指導のあり方を見えにくくしている。

「文字指導」は、子どもたちの文字獲得過程における「トップダウン的意識」と「ボトムアップ的意識」との両者について行われるべきものである。保育者には再度、幼児教育における「文字指導」が示す範囲を確認することが求められる。

2) 文字獲得過程における子どもたちの発達段階を把握する

保育者は、自身の文字指導を自覚した上で、子どもたちが文字の獲得過程においてどの発達段階にあるのかを把握する必要がある。子どもたちが生活の中で文字に親しむためにはどのような環境が求められるのか、構成した環境を通して子どもたちは文字のどのような機能に気付くのか、子どもたちが読み書きの主体者となるためにどのような環境や遊びが必要なのか、自身の保育と子どもたちの文字獲得過程との関係を捉えなおすことが求められる。

文字環境や遊びは、柴崎の「文字意識の発達段階」における「トップダウン的意識」の土台となる。今後は、幼児の生活や遊びの中にどのような文字獲得のための準備が潜んでいるのか、要素として抽出することが必要となる。

3) 子どもたちの育ちを共有する

最後に、幼児から小学生へ向けて途切れない文字指導を行うためには、子どもたちの育ちを、保育者と小学校教員が共有することが求められる。

平成29年3月に告示された「幼稚園教育要領」には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明記された。これは「資質・能力」を具体的に育てようとするときに、教師が指導を行う際に考慮すべき点を表したもので、次の10項目からなる⁹。

- (1) 健康な心と体
- (2) 自立心
- (3) 協同性
- (4) 道徳性・規範意識の芽生え
- (5) 社会生活との関わり
- (6) 思考力の芽生え
- (7) 自然との関わり・生命尊重
- (8) 数量や図形, 標識や文字などへの関心・感覚
遊びや生活の中で, 数量や図形, 標識や文字などに親しむ体験を重ねたり, 標識や文字の役割に気付いたりし, 自らの必要感に基づきこれらを活用し, 興味や関心, 感覚をもつようになる。
- (9) 言葉による伝え合い
- (10) 豊かな感性と表現

ここに記された姿は、「5歳児修了時に完全にできるようになる」「できるように育てなければならない」という到達目標ではない。きっと子どもたちは、こちらに向かって進んでいるだろうという姿であり、「このような方向に向けて指導を進めよう」という方向性である¹⁰。

小学校へ子どもたちの育ちを伝える際に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用し、共有することで、子どもたちの育ちを受け渡す環境の整備へつなげることが可能となる。

4) 途切れない指導を実現するために

以上、幼児から小学生へ途切れない文字指導を行うための視点を提案した。しかし、その実現にはさらなる実証的研究が求められる。

第一に、保育者が自身の文字指導を自覚できるようにするために、幼児の生活や遊びの中でのどのような文字獲得のための準備が潜んでいるのか、要素として抽出することである。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に示された「数量・図形、文字等への関心・感覚」とは、具体的にどのようなものをいうのか、またどのような指導において生まれていくのか、実践の中から明らかにする必要がある。

第二に、子どもたちの育ちを保育者と小学校教

員とが共有するために、現代社会における幼児の文字獲得状況と、幼児期において育むべき「文字意識」の段階とを再度見直し、幼小接続期における育ちを検討するための指標を確立することである。

文字意識の育ちや文字指導に限らず、指標を確立し評価スケールを開発することは、保育・幼児教育の質の向上のために欠かせない。日常の保育・幼児教育に隠れている「教育」の側面を言語化していく必要がある。

謝辞

本研究にあたり質問紙調査にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

注

- 1 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領解説 国語編、p.24
- 2 稲垣佳世子・波多野誼余夫 (2003) 『人はいかに学ぶか 日常的認知の世界』14版、中央公論新社、pp.99 - 101、(初版1989年)、括弧内引用者
- 3 前掲書、p.103.
- 4 前掲書、p.112.
- 5 柴崎正行 (1987) 「幼児は平仮名をいかにして覚えるか」村井潤一・森上史朗編『保育の科学』ミネルバ書房、p.198.
- 6 前掲書、pp.197
- 7 前掲書、pp.197 - 198.
- 8 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領解説
- 9 文部科学省 (2017) 幼稚園教育要領、pp.3 - 5.
- 10 無藤隆編著 (2017) 『平成29年告示幼稚園教育要領 まるわかりガイド』チャイルド本社

引用・参考文献

- 天野清 (1986) 『子どものかな文字の習得過程』 秋山書店
- 稲垣佳世子・波多野誼余夫 (2000) 『知的好奇心』 中央公論新社
- 稲垣佳世子・波多野誼余夫 (2003) 『人はいかに学ぶか 日常的認知の世界』14版、中央公論

藤本朋美：保育者の文字指導観に関する考察－保育者は幼児の文字との関わりをどのように捉えているのか

- 新社
国立国語研究所（1972）『幼児の読み書き能力』東京書籍
- 柴崎正行（1987）「幼児は平仮名をいかにして覚えるか」村井潤一・森上史朗編『保育の科学』ミネルバ書房、pp.187－199.
- 巢立早希・和田圭壮（2014）「幼児期における文字指導に関する一考察～園における実態調査に基づいて～」『福岡教育大学紀要』第63号、第5分冊、pp.83－93.
- ベネッセ教育総合研究所（2015）『これからの幼児教育』2015年夏号（<http://berd.benesse.jp/>）（2017年8月20日閲覧）
- 前田敬子（2015）「『書くこと』の保幼小連携」『仁愛女子短期大学研究紀要』第47号、pp.45－56.
- 松川利広監修（2010）『子どもの育ちと「ことば」』保育出版社
- 無藤隆編（2001）『幼児の心理と保育』ミネルヴァ書房
- 無藤隆編著（2017）『平成29年告示幼稚園教育要領 まるわかりガイド』チャイルド本社

Summary

This study aims to connect character education from early childhood education to elementary school education. First, I examined opportunity of infant's language acquisition and development process of infant's letter consciousness and the role of teacher. Next, I analyzed teacher's view of letter teaching based on the questionnaire survey result. As a result, despite teachers teaching letters, it became clear that they were not conscious of it.

I clarified the following two points. (1) Teacher's unconsciousness can be explained by Inagaki's "Hidden cultural education" and Shibazaki's "Top down consciousness" and "Bottom up consciousness". (2) Teachers are strongly aware of "Bottom up consciousness" in letter teaching.

In this study I could not extract the elements of the letter acquisition process of children, and I could not associate that element with teacher guidance. It is required to clarify the relationship between the process by which children acquire letters and the guidance of teachers.